



青電社とは？

私は名古屋守山区に本社を置く「青電社」の経営者としていま仕事をしています。青電社の業務内容は電気設備工事の設計、施工。工事対象は大小多種多様に渡り、工場や公共施設における高圧変電設備の新設・改修、オフィス内の通信ネットワークの構築、身近なところでは住宅にコンセントを新設・増設なども含みます。最近では太陽光発電システムや防犯カメラの設置も増えており、メンテナンスや修理を含め電気に関わる仕事はほぼ網羅し、電気設備に関するお仕事をワンストップで請け負う会社として40名ほどのスタッフを率いて日々仕事をしています。また先期からは水道工事事業もスタートさせました。

青電社への誘い

青電社は先代が1972年に立ち上げた会社です。会社が生まれた年と同じ年に私は名古屋で生を受けました。今年私は48歳になるので会社も今年で48周年を迎えることになりました。母の再婚相手である先代には事業承継できる子供がなく、うちの会社に入らないか？と幾度となく誘われていたのですが、その度に私は断っていました。断り続けたのは私自身「縁故」は好きではなかったからです。縁故だから入れたと言われるのも気分が良くありませんし、普通に頑張っているのだとなかなか認められない。通常の人の何倍もの成果を出して初めて認められるのが縁故入社、その時点でそこまでの覚悟を私は持つことが出来なかった。なので、お話を断り続けていました。

忘れられない一言

私には小さいころに言われてずっと忘れることが出来なかった言葉があります。それは小学校6年生の時、担任の安藤先生に言われた一言。私は授業が大嫌いでどの教科も好きになれず、学校は友達に会いに行くか部活だけでした。そんな私に安藤先生はこう言いました。

『北原は自分の得意なことをとにかく伸ばせー苦手なことはあつて当たり前、自分が出来ないことはそれをできる人間を使えばいいんだ』。その一言が強烈に頭に残っていて、人を使えるようになるには社長になるしかない！いつになるか分からないけど社長になろう！そんなことを思ったのです。今でもはつきりと覚えている、私の人生に大きな影響を及ぼした一言です。

入社を決めた一言

先代はその後私を誘いつづけ、ある時こんな話をしてくれました。『貴方がやりたいことは電気じゃないかもしれない。でも青電社の仕事をすることで自分がやりたいことを見つけて、そのやりたいことを青電社を使つてやればいいじゃないか。ゼロから山を登るのではなくて、五合目から山を登る方が早いだろう』という風に言ってくれたのです。その一言がすごく腹に落ちました。『そうか、電気が自分の天職ではないかもしれないけれど、青電社を大きくするなかで自分のやりたいことを見つけたら、やりたいことを思い切りやるかもしれない』と思ひ、青電社に入ることを決意しました。そして24歳の6月に入社をしました。ちなみに先代の名前は安藤社長、そして小6の時の担任も安藤先生、安藤さんという名前に私は縁があるのかもしれない。

思いもよらない恐怖

縁故で入ったからには人の3倍働かなければ認められない、そして将来絶対に社長になる！と強い決意

のもと青電社に入りました。まずはマンションやアパートの配線工事や仮設電気の工事などから私の仕事は始まりました。そして初めて電柱に上ったときに恐怖のあまり叫び声を上げそうになりました。下で見ているのと実際に上るのでは見える風景がまるで違うのです。実は私は高所恐怖症で高いところがまるでダメなのです。。。恐怖のあまり足がすくみ、動くことがまったく出来ませんでした。でも下では先輩社員が見ている、このままでは人の3倍働くどころかまったく使いものにならない。勇気をふりしぼり最初の一步を踏みだしました。

極限の日々

覚悟をする人間案外出来るもので、そこからは自ら志願してほとんどの電柱を上って電気を通電していました。当時の青電社は社員が10名くらい、先代の超ワンマン会社でした。先代は九州出身なのですが、まさに九州男児そのもので、余計なことは一切言わない。だからどういう風な会社にしたののかも全く分かりませんでした。ただ唯一「青電社ってどうやって名前を付けたのですか？」って聞いたことがあるのですが、その時は「青春の青だ」と言っていました。だから若い人が集まるような会社にしたっていう思いがあったみたいです。でもいまの青電社は私もちよつと考え方を変えて『生涯青春の青』ってしているんですよ。老若男女関係なしにずっと挑戦し続ける集団が「生涯青春」。だからそれが青電社の青なのだ今は定義づけています。青電社に入つてからは死ぬ気で働きました。1月3日には現場に出て、会社に泊まり家にはシャワーと朝食を食べるだけに帰り、また会社に逆戻りという生活。次に休めたのは4月に入ってからでした。今では考えられないほどの極限状態でしたが、限界まで頑張ったおかげで仕事は早く覚えることが出来ましたし、周りも段々と私のことを認めてくれるようになっていました。

社長就任と先代の深い愛情

そして35歳で常務になりました。社長はどんどん

仕事を取つてくるのですが、実際に現場をやってくれる職人さんがいなくてよく喧嘩になりました。でもこの時のピンチを助けてくれた職人さんとは今でも協力しあえる良い関係が続いています。この頃になると今までの先輩社員は独立して下請けになった人、ライバル会社に行った人とかかなりメンバーが変わってきていましたので、社長交代の準備を着々と進めていきました。そして39歳の時、会社の決算に合わせ社長に就任しました。最初の1年は先代が会長として残りましたが、2年目になり会長は自らの進退を半年以上2年以内に辞めると発表。どうせ2年以上いると想像していたのですが意外にも半年できっぱり辞めました。そして会長が辞める時に私よりも社歴の古かった社員を『俺もやるからお前もやる、社長がやりにくい』と辞めさせました。確かに癖は強い人でしたが、私はいて欲しかった。でも先代が『俺でも使えなかったんだからお前が使えるわけがない』と一言。こうして会社を知り尽くした2人がいなくなり私は1人になったのですが、これは今から振り返ると先代の私への愛情だったのだと思います。

